

この抑留キャンプでは毎日のようにオランダ軍の使役でした。私は幸いに日本軍が占領当時、オランダ兵、原住民を含め治療活動を行っていた関係から顔なじみになっていましたので、使役に含まずと、お前は働かないでも良いと使役から除外してくれて助かったことです。

若いオランダ兵と片言交じりの会話で語り合っている時を楽しく過ごしたことも懐かしく思い出します。

昭和二十一年五月二十二日、ジャカルタ港を出港し六月五日、和歌山県田辺港に、夢に見た故国の土地をこの足で踏み締めることが出来ました。そして列車で大阪を経由して無事故郷に帰還することが出来ました。

兄がニューギニアで戦死したことを知らされ、大変なショックを受けました。生家を継ぐため兄嫁と結婚し働きました。近所の農家と語り合っただけで土木工事の下請仕事を、特に建築工事の基礎工事を中心に、農事の余暇を活用した副業を計画、積極的に推進し一生懸命働きました。当時の建築ブームの波に乗り農家

経済を潤し、子供達の教育費を助けました。

現在は子供達に守られ、幸せに老夫婦揃って元気で送っています。

私の海軍生活

戦艦「伊勢」と共に

兵庫県 池田 信雄

私は中国山地の森林王国と言われた、杉、檜の名木の産地、兵庫県多可郡杉原村で、農業と林業で生計をたてている家の末っ子として、大正十三（一九二四）年三月三十一日に生まれた。父は私が五歳の時死亡、母と十八歳年上の兄、姉が養蚕・水田で生計をたててくれていたが、この故郷は現在でも水質源を確保し、清い水を谷から海に流し入れ、下流の漁業者を潤わせている。

私が成長する頃は、支那事変もあり、郷里からは多くの青年が出征し大陸で戦っていた。このように時代

環境は軍国時代であったので、私は兵隊に行くのを楽しみにし、義務とも考えていた。大きな職「祝出征」を立てて送られる光景、役場には「少年兵募集」のチラシ、ポスターが貼られていた。私も義務教育が終わると、青年学校で軍事教育を受けていた。

私は、昭和十七年志願兵として、九月一日、大竹海兵団（呉海兵団は満杯のため）に入団した。母は、「男だから兵隊に行かねばならぬだろう」と覚悟し、海軍志願を許してくれた。本来の徴兵ならば昭和十九年徴集であったのだから、母の本心は二年も早く兵隊へ出すのはつらかったろうと今でも思っている。

私が入団した時は、大東亜戦争開戦十カ月であり、南方の戦線も勝利の連続で、我々の心も高揚して海兵団入団時もマイナス情報は無かった。その時、ミッドウェー海戦の大損害は公表されず、我々も国民も知らなかったわけである。

私は、志願兵であるので第五十二分隊に配属されたが、一個班十二人、十二個班で一個分隊であるから総員一四四人である。陸軍の中隊と海軍の分隊は同じく

らしい員数である。

農家育ちの我々はハンモックで寝るのは初めてであり、吊るのは競争だが、しまうのが大変で、遅いと担いで走らされ、捧げさせられ、初年兵教育は厳しいものであった。

入団し、四等水兵を命ぜられ、十一月一日勅令第六一一号で二等水兵、十二月十五日一等水兵、三カ月で新兵教育を終了し、同日、戦艦「伊勢」へ乗組みを命ぜられた。初めて乗る戦艦の大きさにびっくりさせられたが、教育も苦しかった。特に農家出身の者にとって水泳には苦しめられた。甲板から板を出して海へ飛び込み、深く入り、海水を呑みながら浮き上がる。標的を泳ぎ廻って帰る。私は入団前から、部落の用水池で水泳の練習をしておいたので幾分楽であった。

少しでも過失があれば、連帯責任で、櫂の棒（バット）で臀を古参兵に叩かれる。従って初年兵の我々の臀にはいつも紫色の「あざ」が消えることがない。また、我々砲術科の者は、艦橋から出されたものを照尺で狙わせる。電気系統故障時の訓練と、学科、術科の

訓練はさらに厳しいのである。

私の簡単な履歴は次の通りである。

昭和十八年九月二十八日 普通科砲術科卒

昭和十七年十二月～十八年六月

軍艦「伊勢」三六センチ砲員

昭和十八年六月～九月

横須賀砲術学校 普通科砲術練習生

昭和十八年九月～昭和二十年八月

「伊勢」十二・七センチ高角砲砲員

以上の如く、私は戦艦「伊勢」の砲術一本で海軍の勤務をしていたわけである。

「伊勢」に乘組みを命ぜられ、まず驚いたのは、三六センチ主砲の大きさであり、その砲身の上で海軍体操の指揮をしていた少尉の姿であった。我々兵隊は甲板で、少尉の指揮で体操をしたのである。

戦艦「伊勢」の戦務の略歴は次の通りであるが、我々乗組員は、当然ながら乗り組んだ艦と同じ戦務である。艦と共に生き、艦と共に沈む、まさに、海軍は

「蓮托生」の仏語にあるごとく「死後、ともに極楽で同じ蓮華の上に生まれ合う」こと、辞書によれば「人と行動・運命をともにすること」である。このように、海軍は艦と運命を共にする。従って一人の過失や未熟が全体の運命を決するのであるから、訓練中の連帯責任を厳しく教育することが判った。

「伊勢」の戦務

昭和十七年十二月十六日～昭和十八年二月二十三日、太平洋方面 戦務甲

カンボジア、シンガポール。仏印カムラン湾へ寄り、シンガポール港に横付けし、パイプで重油を積み込んだ。錫を積んでいた（輸送船がやられたので）。帰りトラック島に寄り、艀節等補給、同島には日本人が多くいたが、その時は砲戦はなかった。

昭和十八年二月二十三日～三月十四日 戦務丁

昭和十八年三月十五日

第四予備艦となり塗装その他の整備

私は、六月三日、第九十三期普通科砲術練習生として、横須賀海軍砲術学校に入校したのは先に申した通りである。教官は厳しい人で、高い砲台まで駆け足で「配置につけ」と命ぜられる。

高角砲は二連装で威力が強い、照尺・旋回・砲手一―四番まで、火薬二人の六人で操作する。主砲（口径三六センチ）は上へ四十五度しか上がらぬので、左右の砲は高角度にして撃つ。照準を合わせて発射させる。口径は十二・七ミリである。戦艦には、防空装置が整っていたので戦闘の時は助かった。

九月二十八日、対空高角砲班教程を卒業し、同日、「伊勢」に乗り組み、高角砲七番砲、右一番砲手で訓練した。

昭和十八年十月―二十年二月二十日、戦務甲、南洋群島方面作戦。「伊勢」と戦務が記されている。

戦局はだんだんと厳しくなり、我が艦は、豊後水道を南下していったが、時既に制海権は連合軍に握られ、爆雷投下を絶えず行っていた。

フィリピンに到着したら敵機の来襲である。我が航

空母艦から艦載機が出撃してからの空襲で、基地航空隊は少なく、我々艦の対空砲火で防ぐ。しかし我が空母四隻は沈没した。「伊勢」も至近弾でやられ、船体が傾いた。その後、先に敵艦隊を求めて飛び立った我が空母艦載機が帰って来た。

しかし、母艦は既に沈没しその姿は無い。帰る母艦もなく、燃料も使い果たした艦載機は自爆、水没していく。その惨状は見るに忍びない。我々は空母の乗組員を助け廻った。紐やボートで助けあげたのである。

敵空襲中「伊勢」の八番高角砲は敵機の直撃を受けた。全員戦死。私は七番高角砲であったのでやられなかった。我が艦「伊勢」は、艦長の指揮と、航海長の操作が良かったので助かったのである。我々は高角砲で弾幕を張っているのに、敵機の墜落するのを見る間もない。米軍機も勇敢に我が空母を目がけて攻撃してくる。敵機と刺し違える覚悟で、一連装の一二・七センチの大型高角砲を撃ちまくった。陸軍の高角砲は七センチで、後に十二センチ砲も出来、対B9大型爆撃機にようやく届くようになったと聞いた。

艦の構造は、艦の中心に弾薬庫がある。「伊勢」の主砲三六センチ砲弾は四〇キロメートルも飛び、弾は一抱えもあるのです、弾薬庫から水圧で砲の所へ上げられ充填されるという素晴らしい装備だが、航空機にはかなわなかった。このように、比島戦は軍発表の大戦果ではなく、惨憺たる大敗戦であった。

海戦が終了し、我々は沖繩へ帰り、「伊勢」が比島沖戦の被弾で海水が入り五度傾いたのを垂平に直す修理をした。今後被弾し鉄板が破られても、最小限で止められるような、小部屋のいっばいある構造に直し、瀬戸内海の基地桂島に帰ったのである。

「伊勢」は十九年二月二十五日に連合艦隊付属編入、五月一日第三艦隊所属となる。

私は呉で、B 29 が爆弾を落して行くのを見たが、森が火災をくいとめていた。その後「伊勢」は砲台の代わりとなり錨を下ろした。呉軍港爆撃の時、我が七番砲は助かったが、他の高角砲で全滅したのもあった。カタパルトも吹き飛んでしまった。直撃弾が来ると、

あのような大艦でも地震のようであった。空襲後、海軍の戦死者の死体を軍港の方で火葬にした。今でも慰霊祭を挙行している。

「伊勢」は六月一日、特殊警備艇となったが、私は、先に申した履歴にある如く「戦艦伊勢」と共であったし、砲術専門であった。その中で、七番砲は全滅を免れ、左一番砲手は敵機銃掃射で戦死したのに、右一番砲手の私は助かった。

私は今まで申したとおり、戦中に若くして日本国のためと思つて海軍に志願して今次の大戦に直接参加した。そのため、戦後いろいろな本を読んでみたのだが、この大戦で感じたことが随分ある。

日本の戦術というか、戦略において、ハワイ攻撃、プリンスオブウェールズ（英の新鋭大戦艦）の撃沈の例を見て、大艦巨砲主義が航空機に取って代わられた。これを実際に成功させたのは日本であった。しかし、その後、この戦訓を実際に転換して成功したのが米国であった。米国は物資も多くあり、生産力が大きいから復元力もある。しかし、日本は国力が米国に比

べて小さいので補充が出来ない。であるから、ミッドウェー海戦後、日米の海軍力は逆転してしまった。

私が実感したのは比島沖戦の時だ、敵が続々と来るので負けたと思った。我が方は、運を天に任せ戦うだけだった。人の命などは一瞬にして吹き飛ぶことを実感した。海戦は陸戦と異なり、一日で勝負がつく。

私の所属の呉の海軍墓地を見ると各隊の慰霊祭があることを知らされる。私の分隊長は岡山の人で、私はその分隊長の従兵もした。その分隊長は今ももう亡くなられたが、帰って来てから出来た子供さんには、私の名前と同じ信雄とつけてくれた。そのように、心のつながりを持った方であり、奥さんは今も健在である。

海軍の生活・戦闘は私にとって忘れる事の出来ないものであり、私の人生において大きな影響を与えてくれた。

【解 説】

戦艦伊勢

戦艦「伊勢」型は、戦艦「日向」との姉妹艦であり、その概要は次である。

大正二（一九一三）年度計画により川崎造船所において竣工した。

大正四年五月十日、起工、同五年十一月十二日に進水、同六年十二月十五日竣工し、戦艦に類別される。

六年より第一次大戦。

昭和十年八月一日〜同十二年三月二十三日、呉工廠で改装、昭和十六年〜二十年、第二次大戦。

ハワイ作戦（昭和十六年〜十七年）、ミッドウェー作戦支援（昭和十七年）、候補生実務艦（昭和十八年）、比島沖開戦（昭和二十年）、北号作戦（昭和二十一年）等に参加、昭和十七年二月二十三日〜十八年九月五日、呉工廠で航空戦艦に改造、倉橋島音戸附近で防空砲台の任務につく。昭和二〇年七月二八日、三ツ子島〜音戸間で米空母機の爆撃を受け大破、着底のまま終戦を迎える。昭和二〇年一月二〇日除籍、昭和二十一年一〇月九日〜二十二年七月四日、飯野産業により解体。